

## 富士山北麓亜高山帯上部でのホシガラスの繁殖記録

西 教生<sup>1</sup>・別宮 (坂田) 有紀子<sup>2</sup>The Breeding Record of Nutcracker in the upper part of  
Subalpine at northern slope of Mt. Fuji

Norio NISHI, Yukiko ( SAKATA ) BEKKU

## 要 旨

富士山の亜高山帯には周年にわたってホシガラスが生息すると思われるが、繁殖は確認されておらず、生息状況についても不明である。筆者らは2011年5月に富士山北麓亜高山帯上部でホシガラスの巣を発見し、同年7月に雛の巣立ちを確認した。これは、日本におけるホシガラスの5例目の繁殖確認および巣の記載であり、富士山では初めての確実な繁殖記録だと考えられた。

キーワード：亜高山帯上部、繁殖記録、ホシガラス

## はじめに

ホシガラス *Nucifraga caryocatactes* は北海道、本州、四国、九州に分布し、繁殖期には亜高山帯の針葉樹林から高山帯を生息場所としている (中村・中村 1995)。本種の繁殖確認は日本産鳥類の中では遅く、1956年4月に長野県で発見された巣卵が日本での初繁殖確認である (清棲 1965)。富士山の亜高山帯には周年にわたってホシガラスが生息すると思われるが、筆者らの知る限りこれまでに繁殖は確認されておらず、生息状況についても不明である。黒田ほか (1971) には、1969年6月18日に山梨県側の富士山5合目で撮影されたホシガラスの幼鳥の写真が掲載されているが、繁殖に関しては触れられていない。

筆者らは2009年10月から、山梨県南都留郡鳴沢村富士山の富士山北麓亜高山帯上部においてホシガラスの生態調査をおこなっており、2011年5月に本種の巣を発見し、同年7月に雛の巣立ちを確認した。これは富士山におけるホシガラスの確実な繁殖記録と考えられるので、ここに報告する。なお、この調査は環境省からホシガラスの捕獲許可、山梨県富士・東部林務環境事務所から県有林への入山許可を得ておこなった。

## 調査地と調査方法

調査地は山梨県南都留郡鳴沢村富士山の富士山北麓亜高山帯上部 (標高 2100 ~ 2500m、約 140ha) である。巣を発見後は繁殖に及ぼす影響を最小限に留めるため、おも

に営巣木から約 10m 離れた位置からビデオカメラ (SONY HANDYCAM、HDR-SR11) によって巣での行動を記録した。ビデオカメラによる撮影は2 ~ 11 日間隔でおこない、1回あたり最大5時間程度とした。雛の巣立ち後に巣の大きさを計測し、巣材を記録した。

## 結果および考察

2011年5月23日、富士山北麓亜高山帯上部においてホシガラスの調査中、2羽のホシガラスが巣材のようなものをくわえて飛翔する姿を目撃した (午前9時4分)。9時50分にも2羽で巣材を運んでいると思われる行動が観察されたことから、この2羽を追跡した。10時24分に2羽が飛び込んだコメツガ *Tsuga diversifolia* の上部を探索すると、外巣部分の完成している巣が見つかった (35°23'N, 138°42'E, 標高 2100m 付近)。外巣はカラマツ *Larix leptolepis* の枝で作られており、芽吹き始めた枝も数本使用されていた。巣が発見された場所はカラマツ、シラビソ *Abies veitchii*、コメツガの混交林で、ハクサンシャクナゲ *Rhododendron brachycarpum* とダケカンバ *Betula ermanii* の低木が少し交じり、林床にはシラビソの稚樹が見られ、土壌表面は蘚苔類に覆われていた。10時38分にも巣材運びが観察されたため、11時38分から13時51分までの2時間13分、ビデオカメラで行動を記録した。その結果、巣に3回の巣材運びが確認され、1回はダケカンバの樹皮を運んで来ていた。

1. NPO 法人自然環境アカデミー  
2. 都留文科大学

Corresponding author : Norio NISHI  
E-mail : arisuinodoramingu@yahoo.co.jp

同年5月26日、午前10時20分に巣を観察すると1羽のホシガラスが巣内に座っており、抱卵中であると思われた。ビデオカメラの映像は10時23分から12時28分までの2時間5分撮影されていた。10時49分に1羽が巣に飛来し、巣にいた個体が飛び立ち、飛来した個体が巣内に座ったため、抱卵の交代であると考えられた。11時43分には1羽が巣材をくわえて巣に飛来したが、その個体は巣材を置いて飛び去った。抱卵の交代と考えられる場面は、11時59分と12時9にも観察された。

同年6月6日、午前9時45分に巣を観察すると1羽のホシガラスが巣内に座っており、抱卵中であると思われた。ビデオカメラの映像は9時49分から14時54分までの5時間5分撮影されていた。5時間5分中には抱卵の交代は見られなかった。しかし、6月6日は強風のため周辺の木の枝で巣が遮られ、巣の見えない時間があつたため、抱卵の交代が映っていない可能性もある。

同年6月14日、午前9時40分に巣を観察すると1羽のホシガラスが巣内に座っており、抱卵中であると思われた。ビデオカメラの映像は9時43分から14時53分までの5時間10分撮影されていた。11時59分に1羽が巣に飛来し、巣にいた個体が飛び立ち、飛来した個体が巣内に座った。その後は、14時53分までこの個体が巣内に座っていた。

同年6月22日、午前11時45分に巣を観察すると1羽のホシガラスが巣内に座っており、抱卵中であると思われた。ビデオカメラの映像は11時47分から14時37分までの2時間50分撮影されていた。12時に1羽が巣に飛来し、巣にいた個体が飛び立った。飛来した個体が巣内の羽の生えていない2羽の雛に給餌をして、雛の糞を食べ、巣内に座った。このことから、抱雛中であることがわかった。その後は12時55分、13時41分に雛への給餌、抱雛の交代があつた。巣に飛来した親鳥は食物をくわえておらず、喉に入れて運んで来たと思われるものを雛の口内へ吐き戻して与えていた。なお、巣内では親鳥が近くを飛ぶハエ類を取って食べる行動が2時間50分中に16回観察された。

同年7月4日、午前9時5分に巣内を観察すると2羽の



図1. ホシガラスの巣内雛。

雛が確認された(図1)。ビデオカメラの映像は10時10分から15時9分までの4時間59分撮影されていた。4時間59分中に雛への給餌が7回確認された。巣に飛来した親鳥は7回とも食物をくわえておらず、喉に入れて運んで来たと思われるものを雛の口内へ吐き戻して与えていた。親鳥は給餌後には必ず雛の糞を食べていた。抱雛はおこなっていなかった。また、生態調査のため、巣内にいる2羽の雛に環境省の足環および黄色、緑色の色足環を装着した。

同年7月11日、巣内を確認すると雛は観察されなかった。同年7月28日には巣から東に250m離れた場所で、飛翔可能な色足環つきの2羽の雛が観察され、巣立ちに成功したことが判明した。

巣の外径は36cm×34cm、内径は18cm×17cm、高さは18cm、深さは6cmであった。地上から巣の底部までは7m20cmで、営巣木のコメツガの胸高直径は73cmであった。外巣にはカラマツの枝が、内巣(産座)にはコメツガの小枝とサルオガセ類、ダケカンバの樹皮と少量のビニール紐が使われていた。

ホシガラスの巣の大きさについて、清棲(1965)は外径40.7cm×35.5cm、内径13.5cm×15cm、高さ20cm、深さ14cm、河辺(1999)は外径39cm、内径15cm、高さ32cm、深さ13cm、柿澤・小海途(1999)は外径約35cm×30cm、内径約13cm×11cm、高さ約18cm、深さ約12cmとしている。今回発見された巣の外径、内径、高さは既存の文献と概ね一致していたが、深さはこれまでに報告のある巣の中でもっとも浅かった。

抱卵の開始日は不明であるが、5月24～26日のいずれかであると考えられた。1956年4月に日本で初めて発見された巣では、4月20日にはすでに抱卵中であり(清棲1965)、河辺(1999)が1972年3月25日に発見した巣では4月8日には抱卵が始まっている。今回、富士山で発見された巣の抱卵の開始は、上記の2例よりも1ヶ月以上遅かった。

抱卵および抱雛は雌雄ともにおこなう(河辺1997, 1999)ことが知られている。設置したビデオカメラの映像から、抱卵交代の場面が見られたため、今回も雌雄で抱卵をおこなっていたと考えられた。石沢(1961)は1927年5月27日に採集したホシガラスの雄(成鳥)の腹部に羽毛がなかったことから、雄も抱卵するとしている。また、ビデオカメラの映像には抱雛交代の場面も映っており、抱雛も雌雄でおこなっていたと考えられた。

清棲(1965)には日本で初めて発見されたホシガラスの巣卵以外に、1956年5月30日に長野県で見つかった雛のいる巣の記載がある。このほかに公表されている記録は、河辺(1997, 1999)と柿澤・小海途(1999)しか見当たらない(河辺の1997年と1999年の文献は、記述から同一の巣だと思われる)。このことから、今回の記録は日本におけるホシガラスの5例目の繁殖確認および巣の記載であり、富士山では初めての確実な繁殖記録であると考えられた。

今回、富士山北麓の亜高山帯上部で発見されたホシガラスの巣の深さは、これまでの報告よりも浅く、抱卵の開始は1ヶ月以上遅かった。抱卵および抱雛は雌雄でおこなっていると考えられた。この結果が富士山では一般的なことであるかについては、今後の調査によって確認したいと考えている。

本研究の一部は、日本学術振興会の科学研究費補助金(奨励研究、課題番号:23924018)の助成を受けておこなわれた。

#### 引用文献

石沢慈鳥 (1961) 日本北アルプス地方で採集した鳥類の夏期の辜丸と卵巣の大きさについて. 鳥 16 : 355-359  
柿澤亮三・小海途銀次郎 (1999) 日本の野鳥 巣と卵図鑑. 世界文化社, 東京

河辺久男 (1997) 木の実を貯える<ホシガラス>. 野鳥の生活 I 新装版 (羽田健三 監修). pp. 96-99. 築地書館, 東京

河辺久男 (1999) ホシガラスの生態. BIRDER. 13 (7) : 34-39

清棲幸保 (1965) 増補新訂版 日本鳥類大図鑑 I. 講談社, 東京

黒田長久・千羽晋示・由井正敏・中村司 (1971) 富士山地域の鳥類. (富士急行株式会社堀内浩庵会編) 富士山富士山総合学術調査報告書. 富士急行株式会社, 東京, pp. 856-948

中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>. 保育社, 大阪

